

令和5年度「ちばっ子の学び変革」推進事業（「学力・学習状況」検証事業）研究
状況報告書

市川市立二俣小学校

1 学校紹介

本学校区は、市川市の東端、船橋市との境にあり、南に湾岸道路と埋め立て地の工業地帯、北に京葉道路が走る。

学校周辺は物流倉庫、商業施設、工場等に囲まれており、緑の樹木は少ない。児童数は年々減少し現在は180名程度であるが、小規模校の良さを生かし、きめ細かな児童理解と良好な人間関係の構築に努めている。令和2年度に創立50周年を迎え、令和4年度より「信篤三つ葉学園」として小中一貫教育への取組を開始した。

2 研究主題

自分の考えを豊かに表現できる子の育成

3 研究の概要

(1) 児童の実態と課題

令和4年度全国学力・学習状況調査において、本校児童の算数の結果は、全体としては全国平均や県平均をやや下回る結果となった。算数の領域別に見ると、例年同様「D データの活用」が平均を大きく下回っていた。本校では、令和2年度から令和4年度まで、D領域に絞って算数の授業研究を進めてきた。その結果、毎年1月に実施している教研式標準学力検査CRT「D領域」において、一定の成果を得ることができた。

また、本校の児童は課題に対して絵や図、数式を用いて自分なりの解決方法を表現することを苦手としている。そこで、互いに学び合いながら、互いの考えや表現の良さを振り返ることにより、自分の思考を深め、より良いものを追究しようという表現欲求が高まるであろうと考え、研究の主題と副題を設定した。

(2) 学力向上のための取組

研究主題にある「自分の考えを豊かに表現することのできる子」を育成するために、次のような取組を行った。

①課題提示・自力解決・比較検討・まとめ・応用問題での習熟という基本的な授業スタイルを全校で統一する。

全学年を通して、上記の基本的な授業スタイルを日常的に定着させることで、提示された課題から、「見通しを立てる」→「学習問題を考える」→「自力解決をする」→「比較検討をする」→「学習のまとめ・振り返りをする」という流れを、教師側も児童側も習慣付けることができた。

また、学年や習熟度に応じて、児童が自分で学習問題を考える習慣を身に付けるよう、授業展開を工夫することができた。

②単元ごとに一人一人の学習状況を適切に把握し、少人数指導（習熟度別・等質編制）など指導形態を工夫する。

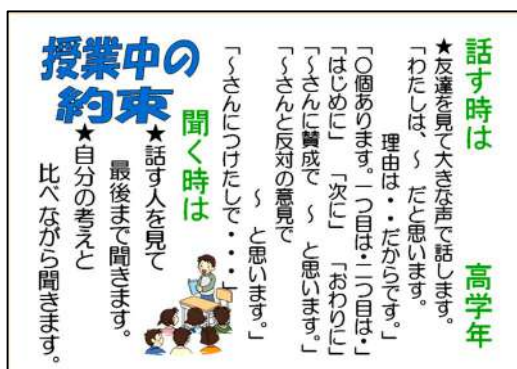
各単元の指導にあたりプレテストを実施し、4・5年生は2グループ、6年生は3グループの習熟度別に分けて指導している。教員間で共通理解を図り、①指導の重点、②既習の掲示物作成、③習熟度に応じたワークシートやヒントカードの作成を行っている。また、習熟度別のクラス内でも算数小グループ（1グループ1算数リーダー制）を編成し、比較検討の場における話し合い活動の充実を図ることができた。



③発表の仕方・話し合うときの決まり（ペア・グループ）・ノートの書き方などの学習規律を身に付けさせる。

話し合い活動においては、①自分と友達との考え方の相違点②友達と友達との考え方の相違点に気を付けながら聞くことを意識させた。本校で年2回（5月・12月）実施している算数アンケートにおける意識調査では、話し合い活動の良さとして、「自分と違う考え方を知ることができる」や「友達と友達との考え方の違いがわかる」と回答した児童の割合が増加していた。

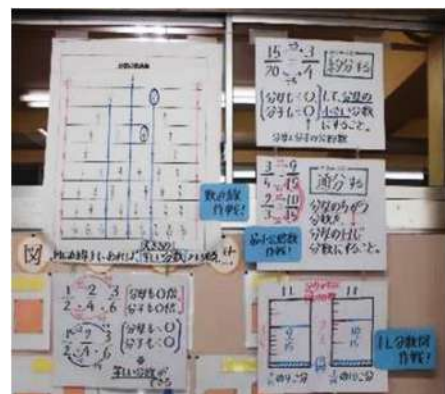
発表の仕方のルールでは、①「まず・次に・だから」などの言葉に気を付けながら発表すること②算数の言葉を使いながら説明することへの意識付けが図られるようにした。また、教科を問わず「学習の約束～話す時、聞く時のルール」について学年の実態に応じた掲示物を活用しながら、年間を通して指導していることもあり、表現のスキルも高まってきている。ノートの書き方では、学習問題を青で、まとめは赤で囲むことを学校全体で共通理解している。



④既習事項を掲示するなど、教室環境を整える。

学習素材を提示し、学習問題を考える場面や、学習問題を設定後に自力解決の見通しを立てる場面において、既習事項を振り返りながら本時との違いについて確認したり、自力解決の糸口を見付けられるようにしたりできるよう、既習事項の掲示を効果的に活用した。

また、既習事項の掲示物は、それぞれの時間のまとめに留まらず、児童の学びの軌跡やつながりがわかるような工夫をすることができた。

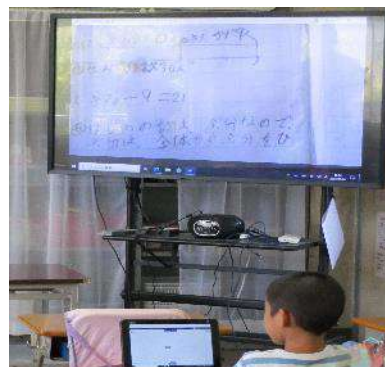


学習問題を提示する場面では、児童がイメージしやすい数量については、0・6 mの長さのリボンや、3分の1 Lの溶液の実物を見せ、長さや量の検討をつけられるように工夫した。



⑥課題提示や比較検討の場でICT機器を効果的に使い、視覚的支援をする。

比較検討の場においては、児童のノートを授業支援ソフトの課題提出機能を活用しながら、効果的に行うことができた。



(3) 加配教員（学習サポーターを含む）の活用

①習熟度に応じたグループを編成し、学習内容の定着と意欲の向上を図る。

- ・単元別にプレテストを実施し、習熟度別に1クラスを3グループに分けることで、それぞれの実態に応じた手立て（ワークシート・ねらいの明確化）を講じることができた。
- ・それぞれのグループにおいても3～4人の算数グループを編成し、比較検討の場をもつことを習慣化することで、自分の考えを相手に進んで伝えようとすることができた。

②教職員間で、児童の振り返りや学習評価について共有し、授業改善を図る。

- ・学習の習熟度や児童のつまずきについて情報を共有することで、適用問題として扱う教材について検討し、児童の学力の定着につながったり、授業改善に努めたりすることができた。

4 成果

本年度は、『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」の中でも「見いだす」に焦点を当て授業研究に取り組んだ。研究仮説「一人一人の学習状況を適切に把握し、既習事項や課題解決の見通しを確認すれば、自分の考えをもつことができるようになるだろう。」(導入の工夫) に対して、既習事項を掲示するなど教室環境を整えた。また、課題提示・自力解決・比較検討・まとめ・応用問題での習熟という授業スタイルを全校で統一することで、児童が疑問や課題をもちながら、学習に取り組めるようになった。

課題提示や比較検討の場においては、ワークシートの工夫に加え、I C T機器を効果的に使い、視覚的に支援することができた。特に比較検討の場では、「自分と友達」「友達と友達」の考え方の相違点について考えながら発表を聞き、学習への理解を深めるとともに、新たな考えへの気付きへとつなげることができた。

5 今後の課題

次年度は、『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」の「広げ深める」に焦点を当てて授業研究に取り組んでいきたい。そこで、本校の研究仮説「自分の考えを表現する場と、互いの考えを深め合う場を工夫すれば、豊かに考えを表現する力が育つであろう。」(比較検討の場での工夫) を達成するために、発表の仕方・話し合う時のきまり・ノート書き方などの学習規律の中でも、「話し合う時のきまり」に重点を置き、比較検討のスキルや場の工夫について、授業研究を通して実践していきたい。